
愛してくれた、あなた。

Skeleton

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛してくれた、あなた。

【ZPDF】

NO253E

【作者名】

Skeleton

【あらすじ】

佳奈が、初めて、恋をした。その人わ そして、最後 感動？の、

LOVE STORY

私は、久しぶりに『夢』を見た。

その夢で、私は泣いた。

すこぐく、悲しい夢を見た。

私の、過去のような、夢を

私の、過去

それは、人には、言えないような、過去。

私の、過去

私は、産まれた時、死んでいた。

ケド、奇跡的に生きた。

親は、いつも喧嘩。

私を、産まなかつたら、離婚する予定だつたらしい。

そして、産まれてから、私は一年間、おばあちゃんの、家で、暮らしていた。

親は、もう一人の子供が、産まれたから、私をおばあちゃんに、預けて貰つてた。

私は、親の愛情をもらつてない、ただの、邪魔な子供として、産まれて來た。

寂しかつた。

そんな、夢を見た。

「はあ。はあ。ううう。」

私は、布団の中で、泣いていた。

声を、押し殺して。

朝まで

小学生の時

私は、友達を1番大切な人として、見て來た。

家に、帰つても勉強。

だから、小学生の時から、よく、遊びぐせが、ひどかつた。

中学生

高校生と、上がつた。

高校生に、なつて、初めて好きな人が出來た。

一日惚れだつた。

ケド、私には、告る勇気がなかつた。

私は、学校でよく告られる。

ケド、その男は、みんな

「エッチしよ。」

「セックスフレンドに、なつて」

とか

毎日、うざい。

そんな中、また告白されてて、エッチされそおに、なつた時、助けてくれたのが、彼だつた。

優真君だつた。

私が、好きだつた人

私は、漫画見たいな話で、少しビックリした。

「大丈夫?」

優真君の、低い声。

ドキッとした。

「あつ。うん。」

私は、下を向いたままだった。

「良かった。君、名前は？」

私は、またドキッとした。

「川崎 佳奈。」

「カナちゃん。俺、優真。よひじべ。」

何回聞いてもドキッとしてしまった。

「うん。ひしべ。」

私は、まだ下を向いていた。

「顔 あげて？」

ドキッ。

何で一言一言、元気でドキッとしたのだろう。

私は、優真の言つ通りに、元気でドキッとした。

「可愛い。いつも、前向けよ。バイバイ。」

か 可愛い。

ドキドキしそぎこ。

あつ。

「あのわ、優真さん。」

「んつ。？」

あああ、顔見られてる

赤くないかなあ

「その、アドレス 教えて下さい。」

恥ずかしい。

優真君は、ニコニコ、

「イイワ。」

と、言って赤外線で、私にメールアドレスをもらつた。

すつじぐく、嬉しかつた。

それから、ずっと、優真君とメールをしたり、教室の前で喋つたりした。

ある日

私の、クラスの男子が

「佳奈ちゃんと、優真先輩と、付き合つてゐるらしいよ。」
とか

「優真先輩、彼女と別れたらしくよ。やつぱ原因は、佳奈ちゃんで
しょっ。」

とか、言つ噂が流れだした。

そのたんびに、優真君が、

「なんか、変な噂流れてるし。佳奈、モテすぎだし。」

とか、言つた。

私は、その返事を笑顔で返していた。

けど、その意味が分かるのは、ずっと、先の事だった。

それから、何ヶ月もたつてから、優真君に告られた。

私は、もちろん”おつ kepada”にした。

それから、毎日のよう、元気をしてくれる、優真。

キスする前に、必ず

「キスしていい。？」

と、聞いてくる。

すぐ、可愛い。

その顔がすぐ、愛おしかった。

そして、ある日

優真が、

「水族館に、行こう。」

つと、言つてくれた。

水族館に、入つてすぐ騒いでいた。

嬉しかつたから。

たぶん、水族館がこんなに、楽しい所なんて、思つた事無いと、思う。

水族館の帰り

優真が、

「今日 僕ん家来る。？」

と、聞いてきた。

私は、すぐに、

「うふ。」

と、言った。

優真の部屋は、すごく男の子って、感じがした。

優真は、アクセサリーが好きだから、部屋中に、いろんな、アクセサリーが、あつた。

私は、どこに座つたらいいのか、分からなかつた。

優真が、ベットを指して

「ひつちに、来いヨ。」

と、言った。

今だに、ドキつと、しまつ。

私は、横にチヨコつと座つた。

「佳奈。好きだよ。」

私を、倒した。

私は、何人もの男に抱かれて來た。

中学生の時に

けど、こんなにドキドキした事は、無い。

「やつて イイ。？」

「う ん。」

私は、初めて、優真に抱かれた。

優しく抱いてくれた。

嬉しかった。

「大丈夫？」

と、たまに声をかけてくれた。

その、優しさが嬉しかった。

「うつ。あつ。あんつ。」

私の声が、優真の部屋に響いた。

「可愛い」

と、ずっとと書いてくれた。

その間、何回も

「ずっと、一緒に西へ」

つと、小声で言っていたのを聞いたよしお、気がした。

そして、終わってから、すいと長いキスをしてくれた。

何回も、してくれた。

そして、

「もお、遅いから、帰る？」

と、言つて帰るおとしたら、最後にロ・プキスをしてくれた。

「、一日がすべく楽しかった。

初めて、あんなに愛された感じが、した。

あの感覚が、忘れられない。

自分が変になつてしまつ。

帰つてから、ずっと、笑つていた。

そして、毎日のよつてに、キスとエッチを繰り返していた。

けど、このじる優真の調子がおかしい事に気づいた。

エッチしている時、二酸化炭素をはいてばっかり。

それに、またに急に立つたら、貧血をおかしたり

このじる、大丈夫かなあ、と、思う事がある。

「優真。大丈夫？」

「うん」

毎日の繰り返し

そして、数日後、優真は入院する事に、なった。

私は、毎日、お見舞いにいつては、キスをしてくれる。

私の、幸せ。

親にも、そんなに可愛いがわれた事無いのに。

いつつも、帰り道で泣いている。

そんな、ある日

プルプル

「うつ。朝から。誰？」

それは、非通知だった。

出るのせ、嫌だった。

ケド、何回も鳴るから、取つてみた。

「はー。どなた」

「佳奈ちゃん! 今すぐ、優真の病院に、来て!」

優真のお母さんから、だつた。

「どうしたんで」

「いいから、来て。」

お母さんさ、泣いてこらへつた、声をしていた。

といつあえず

「はー。」

つと、言つて切つた。

私は、嫌な事を思い出した。

優真の、貧血。

酸素を吸わない体。

なんか、嫌な予感がした。

私は、急いで、優真の居る病院へ行った。

ガラガラ

「優真！　いない。」

ビニヤ、行つたんだろ。お。

私は、優真のベットを眺めていた。

そして、

「死なないで。」

と、祈つた。

『手術室に、来て。優ママ』

そこで、風と一緒に、紙がおちてきた。

手術室

優真が、居る

私は、病院を走りました。

看護師に怒られたりした。

ケド、そんな声など聞こえなかつた。

「優真。」

私は、何回も叫んだ。

そして、やつと着いた。

手術室

優真のお母さん、お父さん、友達

たくさんの人がいた。

皆、優真が世話になつた人達。

私は、お母さんと田が、会つた。

「佳奈ちゃん」

「優真は」

お母さんは、

「分からぬ」

つと、言つた。

『優真』

と、何回も叫んだ。

そして、手術室のドアが、開いた。

お母さんが、

「優真は、」

皆、沈黙になつた。

「佳奈さんは、いますか。？」

と、言われた。

私は、ビックリした。

「はい。私は、」

「少し、来て下さい。」

私は、手術室に呼ばれた。

優真が居る

「優真さんが、佳奈さんと、会いたいと、

「お母さん、

と、言われて優真の居る場所に呼ばれた。

「優真？」

「佳奈」

私は、優真に抱き着いた。

「優真 大丈夫？」

「うん」

「優真 佳奈の、将来の夢何か、しつてる？」

「さあ。」

「優真の、お嫁さん。」

「それは 嬉しい わ。」

「優真も、一緒？」

「当たり 前や」

「嬉しい。」

「優真 大好き」

「俺も 佳奈の 事 大好き」

「いい。」

「優真？」

「午前、10時30分、堀田優真さん。」

医者が、言った。

「優真あ。うわあ。」

私は、優真の横でずっと泣いていた。

十年後

「佳奈あ。行こう。」

「うん。」

私は、この十年間、優真の墓に、行っていた。

必ず、10時30分に、行っている。

私は、親にも愛されず、ダチが一番と、思っていた。

ケド、初めて、誰かに愛された。

すくなく、嬉しかった。

優真だけだった

こんな私を、最後まで愛してくれた。

私の、ユイツの人。

大好きな、人。

この世界で、愛した人。

運命を信じた人。

私は、あなたを愛して損など、してない。

私を、最後まで、尽くしてくれた。

笑った時も、泣いた時も、怒った時も、いつも、一緒に居てくれた。

私は、優真のおかげで、自分が大切な、人間と、言う事が、分かつた。

私に、すべて教えてくれた。

あなたに、もう一度、あつて言いたい。

「ありがとう。私を、愛してくれて。。。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0253e/>

愛してくれた、あなた。

2010年10月10日17時58分発行